



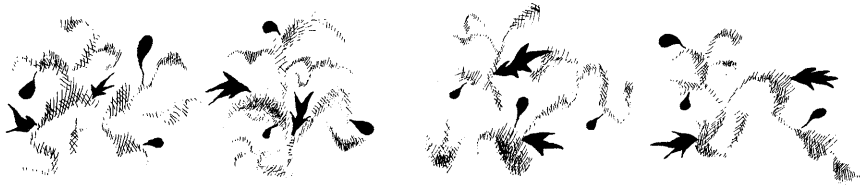
OMEP世界大会を終えて

津守 真

四年間にわたって準備してきたOMEP世界大会が終わった。

海外四十数か国から約三百人、日本国内から約千六百人の参加者があり、盛況であった。

その準備には、世界大会運営委員会、実行委員会の五十人を超える方々が長期にわたりあたられた。当日は数え切れないほど多くのボランティア、アルバイトの方々がこの世界大会のために行き届いた世話を下さった。海外の人達も、カナダにある



OMEPP世界事務局、英国のOMEPPジャーナル編集部をはじめ、多くの方々が労力を提供された。

日本国内の幼稚園、保育園の諸団体からは並々ならぬご協力を頂き、また、関係行政諸機関の援助、後援を頂いて、この世界大会は可能になった。

今回の世界大会は、最初から最後まで専任職員はひとりもなく、ほとんどボランティアによって運営されたことは大きな特色であった。子どももの仕事を通じて世界平和に寄与したいという多くの人の心の願いがそれを可能にしたのだと思う。

七月二十八日に世界OMEPP常任理事会がはじまり、世界大会の前後に世界理事会、常任理事会が行なわれたので、全部で九日間に及ぶ長期の会合であった。世界大会の始まる前にOMEPPデーがあり、ジンバブエのフェイ・チュン女史の講演、ユーゴのベシク女史のスライドと講演があり、横浜市民と地域の養成校の学生達が集まった。八月一日夕六時から、秋篠宮妃殿下のご臨席のもと、赤い靴記念事業団合唱団の子ども達による柴田南雄作曲「北越戯譜」の演奏から開会式が始まった。八月二日から、講演、シンポジウム、分科会、「世界の保育と施策をみる」VTRショー、「世界の子どもの祭り」と祝いの展示、「インターナショナル・バザール及びOMEPPグッズセール」など、十教室で平行してプログラムが行われた。また、保育園、幼稚



園諸施設の見学も行われ、それぞれの施設でおもてなしを頂いた。八月二日夜のアジア・太平洋子ども歳時記は、韓国の華やかな舞踊からはじまり、アジア太平洋諸国の人々の歌や踊り、そして日本の岩手民謡で終わった。八月三日夜は、氷川丸船上でインターナショナルの夕べが行われ、アジア太平洋地域、アフリカ、南米、北米、ヨーロッパと世界中の国々の人々が賑やかに踊り、歌った。そして八月四日にOMEPP世界総会の際にはOMEPP日本委員会名誉会長莊司雅子先生に、世界OMEPP名誉会員の賞状が贈られた。ひきつづき閉会式では、次回、北欧五か国の協力によって、デンマーク、コペンハーゲンで開催される第二十二回OMEPP世界大会にOMEPPの旗を引き継ぎ、名残りを惜しみつつ、散会した。多くの人が、開会式の音楽をいつまでも幻のように思い出すと語り、また、世界の保育者が一緒に数日を過ごした事実に感銘をうけたと語った。

世界大会の周辺プログラムには、「横浜美術館」における「世界・子ども美術展」、阪神の大地震の子どもの絵画展、「人形の家」における「人形・おもちゃが語る日本人の子育て」展が行われていた。また、世界大会後、OMEPP会員の好意により国内約十地方でフェローシッププログラムが計画されて、特に海外の参加希望者の二泊旅行が行われた。また、横浜市内の幼稚園、保育園のご好意により、会期中、いくつかの園のホールでの宿泊がなされた。お世話にあたられた方々はその準備に容易ならぬ



ご苦労であったが、いずれも海外からの参加者にとっては、普通には得難い体験で、大いに喜ばれた。

これだけ多くの人々が集まった多様なプログラムの中では、参加者によってそれぞれ印象も感想も異なるであろう。私は準備の最初から責任をもって参画した主催者であり、参加者の方々にはさぞかし不便や不満足を残したことだろうと思い、申し訳ないことがいろいろである。

この四年間、私は世界大会のことを考えない日はなかったが、その日は否応無しに來てしまった。そして世界理事会前夜まで私共はアジア、ロシアなどの参加者のためのビザの事務に追われていた。最後の瞬間まで、ビザがとれるかどうか分からず、どの国の人が参加できるかも分からない状況だった。

いま、世界大会を終えて私なりに考えたことを記したい。

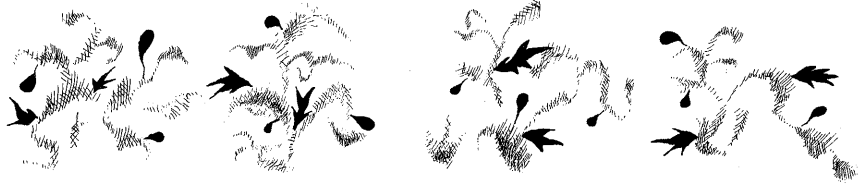
開会式から閉会式に至る間に、次第に私自身に明瞭になってきたことがある。それは、子どもの幸せと世界の平和とは切り離せないということである。今年には戦後五十年の記念の年であり、日本人にとっては平和というテーマは常に心にある。実際に世界大会が進行して多くの人が子どものことを語り、自分もまた話すうちに、子どもが



幸せでないところに平和はないという考えは確信に近くなった。海外の参加者のバックには荘司雅子著『親と子のための平和教育』（財団法人広島平和文化センター）の英訳が入れてあったが、ヨーロッパから来られた一人の男性は、ホテルで夜これを読んで涙がとまらなかったと私に話された。また、カナダのひとりの女性は、子どもの笑顔のあるところには平和があることがよく分かったと言って横浜のホテルを去って行かれた。こう考えると私共の日々の保育そのものが平和をつくる営みであることが自覚される。

世界大会最終日、デンマーク委員会によって企画された「子どもにとって二十世紀とは？」というシンポジウムで私は話をする機会を与えられた。とくに「日本のような国で子どもの権利は何を意味するか」という話題が私に与えられていた。私は今世紀前半の倉橋惣三の遊び中心の保育の歴史を語り、二十世紀後半、高度成長期以来、日本の社会と教育に浸透している競争原理の考え方、その結果としてのいじめや子どもが自殺など社会病理現象の増加について述べた。そして、現在の保育の課題は、子どもが自分で選択する保育、子どもの独自の世界を尊重する保育をつくることであると結論した。

二十世紀の初め、エレン・ケイは、『児童の世紀』という書物を著し、忽ち数か国



語に翻訳された。私はこの機会にこの書物を読み直した。エレン・ケイは子どもの中に「未来への意志」を育てることと、「子どもに固有の世界」を尊重することとを教育の根本と考えた。幼いときから、自分で選択して遊ぶことを経験した子どもは、未来に自分が何事かをなし得るとの希望と意志をもつだろう。また、子どもが生きていく独自の世界を尊重することは創造的な社会のもとであり、それを発見することは教育の出発点であり、また保育者の楽しみである。このことは今世紀の初めから現代に至るまで子どもの教育の課題でありつづけている。おそらく次の世紀も同様であろう。

いま身近に当面している保育の課題は、世紀の課題だったし、広く世界の保育の課題でもあることを、私は今回の世界大会によって再認識した。

OME P世界大会の開催にあたっては、日本の幼稚園、保育園、保育者養成校、その他保育関係者の方々に、物心両面にわたり、並々ならぬご援助を頂いた。また、OME P世界本部の方々には、長期にわたり親身な協力を頂いた。どの一人の方もその協力なしには世界大会の開催はできなかったろう。感謝あるのみである。そして、日本及び外国からの多くの参加者の子どもへの熱い思いがなかったなら、この世界大会はなかったと思う。

(愛育養護学校)